

紅い、花
(十七) 償い

琉 紅

城の本丸を占拠し続ける本部平原軍と、平地に布陣する中山連合軍を、賢龍は呆然と見続けた。

美久は、静かに話し始めた。

「この琉球は、この海の果てから尚巴志なんて比べ物にならないくらい大王達、もつと多くの大軍に囲まれているの。ここで死んだら駄目よ、生きて外に出て、答えを掴んでくるのよ……それと、この花、本物を見て、そして戻ってきて……これを私だと思つてつれていつてくれる？」

美久の頬には涙が伝う。

手に持っていた紅色の花のかんざしを、賢龍の胸に押しつけた。

「これは、君にあげたものだ、なぜ返すのだ？」

それを右手に持ち、美久に必死に問う。

「さあ、お願い」

と、美久は将兵に命令を下した。

彼らは、賢龍を取り押さえにかかった。

「美久！ 何をさせておるのじゃ」

美久は震える声を制し、最大の威厳を将兵らに向けた。

「殿のご乱心じゃ、取り押さえよ」

将兵の一人は、

「殿、申し訳ありません。美久様が殿に、そのかんざしを渡したら、このような事をするとの命令でございます」

「彼らを許してあげて、私が昨日お願いしてあったの。私が指示していたの」

「私は、この城とともに討ち死にする覚悟ぞ、美久、こやつらに何を吹き込んだのだ」

遠く、中山の方向から太鼓の音が三度鳴った。

賢龍を見つめる美久の両目が閉じられた。しかし溢れ出る涙は、ぎゅつと目を閉じても止めることができなかつた。

(もう少し時間が欲しい)

「何だ、この太鼓の合図は、美久、総攻撃が始まるぞ。戦おうぞ」

「違うの」

美久は一步、兵士に取り押さえられている賢龍に近づいた。「愛しているわ……あなたは私の真実でいて欲しいわ。そして、私はあなたの奇跡になりたいの」

再度、中山の最前線から太鼓の音が鳴り響く。

城を越えて琉球全土に伝わるかのように。

「最高軍師である私の命と引き替えに、北山の降伏が受け入れられる。私は中山連合軍の兵士を数多く殺してしまつたわ、

もう、私は鬼よ。最後にあなたと北山の民のために、王妃としての役目を果たすわ」

賢龍は叫ぶ、

「手を離せ、私は死を選ぶ」

美久は下唇を思いつきり噛んで、老武士に指示をする。

二人の若武士が賢龍に近づき、長刀を右手から取り上げ、押さえつけては腹部を叩いた。賢龍は気絶した。

「さようなら。私はあなたを愛しています。私の分まで生きて」

美久は賢奏の頬にそつと触れた後、振り向き本丸の手前、庭先の城壁の上に両手を広げて、目立つように立って目を閉じた。

美久は震える小さな声で、この詩を詠んだ。

「神の子としてこの世に生まれ、

愛を与え、久高に生きる。

愛を受けて、琉球で花に、

女になりて、あの世に渡る」

血にまみれた両手を見て、

「鬼女に変わりて、地獄に堕ちる」

肅然と、大君率いる弓矢隊が整列した。

「さあ、私はここにいます。討ちなさい！」

その声は、連合軍の頭上を越えて、中山の本陣に届いた。連合軍、全ての敵兵士は美久を注目する。

彼女の前に立ちはだかるように、北山の兵士、四五人が現れた。最後まで戦う意志を示そうとしているのだろうか。

別れを告げているのか、説得しているのか、何らかの言葉が交わされている。大君の本陣からは、そう見える。

しばらくして、そんな彼らを美久は振り払った。

そして、再び中山連合軍に向かい両手を広げる。

「美久様！」

北山軍の将兵等の絶叫も、大君、青江、中山本陣軍、尚巴志の耳まで届いた。

「諦めたようじゃ」

大君の今帰仁城を指し示す手が上がる。

十数本の矢が放たれた。その一本が、彼女の胸から背中へと突き抜けて止まった。

「ああーあーっ」

次々と矢が着物の上から突き刺さる。それによる苦痛に喘ぐ声が、両軍に伝わった。最後の力を振り絞るかのようになり立ち続けるが、やがて力尽き、そのまま後ろへと倒れた。

「美久様！」

つづく